

オープンサイエンスの深化と推進に関する検討委員会  
(第24期・第4回)

議事録

1. 日時 平成31年4月5日(金) 10:00-12:00
2. 会場 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構 国立情報学研究所  
1901~1902 会議室 (19階)
3. 出席者(五十音順、敬称略): 相澤 清晴、喜連川 優、木村 学、久留島 典子、  
澁澤 栄、林 和弘、引原 隆士、溝端 佐登史、村山 泰啓、渡辺 美代子  
オブザーバ参加: 梶田 将司(京都大学、遠隔参加)
4. 議題
  1. 情報提供(木村委員)
  2. 報告書構成と執筆分担に関して現状と課題
  3. その他
5. 配布資料  
資料1 「国際深海科学掘削計画(IODP)とは?」(木村委員)
6. 議事
  1. (木村委員の発表) 木村委員より、資料1にもとづいて国際深海科学掘削計画  
(IODP; Integrated Ocean Drilling Program、今は International Ocean Discovery  
Program)、および同分野におけるオープンサイエンスに関する議論が紹介された。
    - 1968年に端を発して、研究者ボトムアップ的な国際的な海洋底掘削・探査計画が米・欧・日の3極体制で進められ、火山、地震、地殻変動、海底下生命圏などを対象に行われてきた。その他、二十数か国が参加する。
    - 日本は1975年から参加、2003年から国際運営による10年計画が行われ、現在2期目の中間にある。
    - 掘削調査で得られたデータ、コア試料などを保管・供与する(コア・リポジトリ)サービスを行うという国際協定を結んでいる。米・欧・日はそれぞれテキサス、ブレーメン、高知。中国も近年活発。温度・湿度管理のうえ厳密にカタログ化するなど管理。デジタルデータも保存。年間5億円ほど米国資金も出ている。
    - コア試料を用いた研究では微量だが試料を消費する。コアは50%を永久保存、50%を研究用として管理する。コア、デジタルデータの共同利用体制がある。
  2. (意見交換) 主な発言の抜粋は以下の通り。
    - 物理的サンプル(もの)の採取はデータと違いコストが非常にかかる。サンプルもデータも大事。
    - デジタルデータのアーカイブは、米スクリップス研究所のIODP運営のセンタ

ーで管理している。

- 掘削の装置類は私企業(シュランベルジャー)などに依存していて、データや採取コアの利用は科学者と同企業との相談できまる部分もある。商業活動に近いと出せないデータも出てくるもよう。
- サンプル試料むけの PID (永続的識別子) 研究データマネジメントプランの作成、研究実施時の支援環境からアーカイブまでのライフサイクルを踏まえたアーキテクチャが考えられる。
- ここではデジタルデータの議論が主となってきたが、標本試料の価値を減ずるものでない。
- 地下の極限環境生命体などは、科学的にも商業的にもチャンスになる可能性があるのではないか。
- IODP 事業はできるだけとれた試料はオープンにする方向で運営。NSF や日本、欧州が運営資金を提供。
- 土壌データ、気象データなど、権利や法律などの要因でオープンしづらい分野もある。官がもつデータだけでなく、民間でもっと大量に重要なデータがある分野もあるだろう。
- 今後、社会科学系データ、人文系データの議論もしていく必要があるだろう。

### 3. (その他)

以上